

山越し爲すべき澤

Shitokoi ukuturu peshi.

峠

Uyekari.

高い

Ri.

大い

Iikiri.

大なる

Borop.

Rupne. とは云はず、こは蝦夷アイヌの語なりと云へり

砥

Rui.

夏

Sakuoshike.

無

Nebona.

傍

Arusanne.

湿地

Saruka.

乾きたる

Satéke.

水淺く

Hakku.

蝦夷アイヌは Satték. にして、この Satték. は反つて千島アイヌにては「乾きたる」にたり居れり

主なる、大なる

Porohn.

蛙

Sake.

シコロの木

Kara.

カライ水

Shinbe.

ニシ(草)

Rabinbi.

岩

Puina.

蛇

Pand. (露西亞語を用ゆ)

一の

Shinep.

岬

No't.

陸

Sat'eki.

川の中の島

Moshiri.

魚の油

Chepke.

石

Poia.

Shuma. は蝦夷アイヌ語なり、されば昔日はこれを使用せり、古歌中 Shuma. の名あり

エゾヤツ	Hup.
松	Shusl.u.
澁	Chârushi.
麓	Buki.
スルダ	Surugu.
取る	Uke.
短い	Tak'ne.
長い	Tanne.
一ツ離れたる小山	Tap'kop.
カバの木	Tât ni.
揺れたる所	Ri kan.
海の芥	Tenita?
飛び越へる	Teriké.
ヤナ(魚を取る)	Urai.

蝦夷アヌは Tesh. と云ふ

そる	Moguteshike.
すべる	Hôrnt.
沼	To.
土	Toi.
一ツ離れたる小山	Tomkom.
二ツ	Tubichi.
降起する	Pushine.
自然に出来たるもの	Tuk.
アザラシ	Tukoro.
クバ百合	Haru.
上ぼる	Rikiné.
茲に何がある	Techida neyanokoneyanbi an.
火	Aboi.
蠟燭の火、行燈の火、トビ獸の油の火	Sumi.
蝦夷語	トビノ獣の油

岩の多き所	Ukaup.
凹き所	Uashine.
淺瀬で急流	Pe't chintunashi.
…間(山なれば)	Ukaturu.
水	Pe.
Wakka. は蝦夷アイヌの語なり	
悪き	Wen.
陸	Satéki.
網	Ya.
冷かなる	Yam.
上がる	Yerikun rikine.
破れる	Sashika.
湯	Seshikibe.
廣	Yak.



人類學教室所藏寫眞 (著者撮影)
第七章 千島アイヌの土俗

千島アイヌ固有の穴及子女

第七章 千島アイヌの土俗(序論)

千島土人當時の土俗は、スラブニツクの所が中々多い、一見露西亞の田舎百姓の様です、又今日は色丹移住後 日本風も中々多く雜て來た、されば現時彼等土人に付て千島固有の土俗を見るは最も困難である、しかし吾人に最も大切、必要なるは後者なりと云はねばなりません、

余は占守、ポロモジリの歸途、軍艦武藏と色丹島にて別れ、茲に上陸し、殆んど一ヶ月間ほど身を千島土人の中に投じ、出來得べきだけ、彼等の土俗中より固有の土俗を還元して見ました、然るに今日は尙ほ老人が少しく残つて居つた爲めに、余は思ふたよりも、多くの材料を得るに至りました、余がこれから記載せんとする土俗は決して現今彼等の示せる土俗でなく、還元した土俗であります、さればこの篇記する事實中、多

く現今彼等の中に見ることの出来ぬものがある、云はゞケヤビテンクツク氏の南洋航海書などで、歐化せられて居らぬ時の南洋土人の土俗を知る様なものでしやう、千島土人の還元的土俗は最も人類學上大切なものである、彼等土人は今日僅かに六十餘人で、これが死てしまつたらば、最早彼等を見やうとしても見られぬのである、殊に彼等固有の土俗は今日までに十中の八九までは殆んど(土俗學的絶滅)して居るのである、されば今にして彼等の中に付て固有の土俗を還元して置かなければ、他日吾人がいかにするとも、残念ながら其土俗は遂に知られずして、終るに至りませう、豈に人類學上最も注意せねばならぬ問題でありませんか、果して然りとせば、余のこれから書て行かんとする土俗は學者の最も参考となるものであると、余はかたく信じて居ります、北海道のアイヌは、其土俗中日本の所が中々多い、これは古來よりの關係上、遂にかくなつたのでしやう、千島のアイヌはこの關係はないらしい、されど北海道のアイヌの土俗を研究する上に於ても、千島土人の土俗は大に参考となるのである、余は出来得べきだけ蝦夷アイヌの土俗との比較を試みやうと思つて居ります、又なるべく唐太アイヌの土俗も比較いたしませう、尙ほ必要上比較する場合があれば、其附近のカムチャダール、アリユート、エキスマー、廣く意味のツングーズ、ギリヤーク、チユクチなどの土俗をも参考といたす考であります、讀者はすでに彼等の言語に付て、前章を御讀みになつたのでありませう、讀者は其言語に付ていかに

考へて居られますか、余はこれに付ては聊か考へがある、其は外でない、彼等は古來北千島に棲つて居つたから其言語中、附近のアリユート語とか、カムチャダール語などの混雜はあるのであらうと思

一人の女子は露化せられる風俗をなせるもの、又一人の手に斧をもてる女子は千島固有の風俗をなせるもの、而して足にはけるはカンザキナリ



千島アイヌの婦女

人類學教室所藏寫眞 (著者撮影)

分離した結果、遂にかくの如き現象を呈して來たのでしやう、かく考へて見れば、千島アイヌのアイ

第七章 千島アイヌの土俗

千島、蝦夷
アイヌの
土俗



人類學研究所所屬寫眞 (著者撮影)

千島アイヌの土俗
女子中一人
は皮靴を作
り、一人は
ムーリ草に
て小籠を作
り居れり、
又一人の男
子は余の標
本として堅
木の模型を
作り居る所
なり
前に置く
數羽の鳥は
エトヒリカ
なり

又語が古語の方に近いか、又蝦夷アイヌのアイヌ語が古語に近いのであるか、これは今後吾人は言語學者とともに熱心研究すべき問題でしやう、
言語すでに斯くの如し、其土俗の如き二者比較せば大に得る所がありましやう、未だ斷言は出来ぬが千島の土俗の方が北海道アイヌの土俗よりも案外古風が存在して居るかも知れぬ、其はこれから余の書て行くもので御推考を願ひたい、
以上は別に記すべき程のものでないが、余の後篇に記載せんとする土俗に付て是非ともこれだけの事は前もつて書て置かねば不都合であるから、讀者の爲めに一寸この事を書て置くこととした、

第八章 北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 (明治三十四年二月 東京地學協會講演)

ブラキストン氏
ミルン氏
モールス氏
北海道石器時代遺跡

私はこれから千島に遺つて居る古物遺跡と云ふことに就て、大體のことを御話して、千島に遺つて居る古物遺跡はどう云ふ人間が遺したものであらうかと云ふことを申さうと思ふ、北海道のことに就ては大分昔から研究した人があります、ブラキストンとかミルンとか云ふ人は、北海道の調べに與かつて力が有るのであります、殊にミルンと云ふ人などは北海道の石器時代の遺跡に就いては餘程研究して居つて亞細亞協會報告(一)とか倫敦の地學雜誌(十二)などに論文が出て居ります、英吉利の人類學會雜誌(十三)にミルン氏の書いたものがある、日本内地ではモールス氏が重にも石器時代を發見した話になつて居りますが、(十四)北海道の石器時代のことを云ふ時にはどうしてもミルンと云ふ人を挙げなければならぬと考へる、此人は餘程古い時から北海道に斯う云ふことを研究して居る、又研究も行届いて居る、是等のことは段々御話しやうと思ふ、外國人では今のやうな人、日本人では小金井博士、坪井博士、斯う云ふ人が先づ日本人で調べられたのであります、北海道は至る所堅穴と云ふ物がある、堅穴と云ふのは窪んだ穴で、それが北海道の各所にあります、此附近を掘ると中から石や骨で造つた器具、それから土で拵へた器具などが出て來るのであります、此事に就いて誰が北海道内地で斯かる堅

第八章 北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一七七

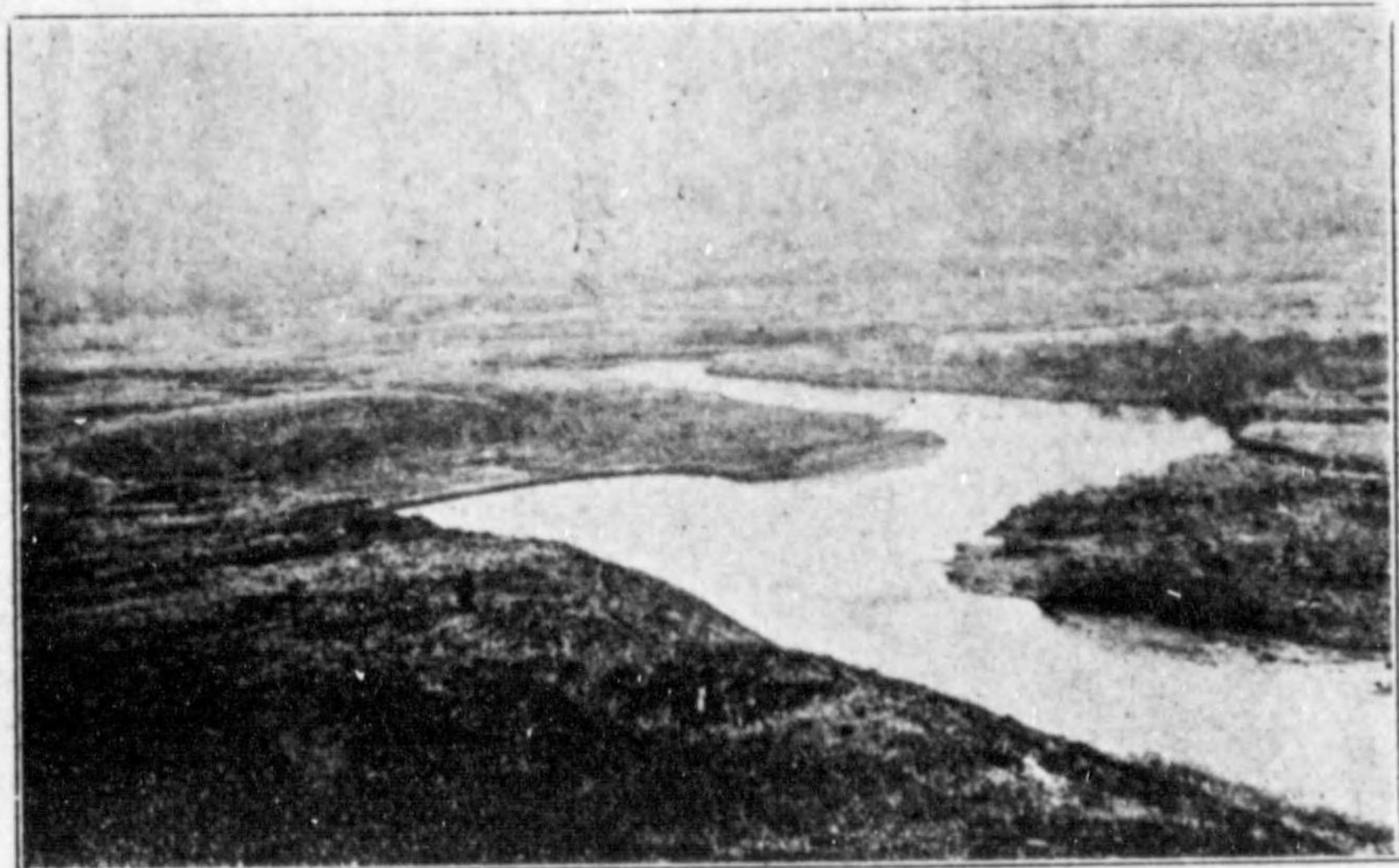
穴に住つて土器や石器や骨器などを使つたものであらうかと云ふ疑ひは、先づ誰に於ても起る問題であらうと思ふ、其事の調べは小金井さん(七)も行かれせし、坪井さん(八)も行かれましたから、其報告は多く出て居つて能く分つて居りますが、其前から研究して居つた人が無いのではなかつたのであります、其人は即ちミルンと云ふ人であり、此ミルンと云ふ人は御承知の如く地震學者であります、傍ら古物のことなどを餘程氣を付けた人であつて、殊に北海道の調べは最初から手を着けて居つたと申しても宜い位であります、

北海道の調べに就きまして尙ほ申上げなければならぬのは、ヒチュコック氏と云ふ人であり、此人は米國「スミソニアンインスチュート」から派遣せられて、小金井さんが北海道及びシコタンへ行かれた時、其の旅行記は同會報告に載つて居りますから分ります、(三)此ヒチュコックと云ふ人が、北海道の堅穴及び石器土器に就て、どんな人間が是等の物を遺したのであらうかと云ふ疑ひを起して調べに來たのである、其調べに來た結果と云ふものは今申した「スミソニアンインスチュート」の報告に出て居りますが、それはミルン氏が會て亞細亞協會の報告に書かれて居るのを繰返したやうなものであります、例へば北海道の重なる所の貝塚であるとか、堅穴を見たとか、擇捉へ行つて穴を見たとか云ふことが書いてあつて、兎に角擇捉まで行つたに違ひない、此人はどうであるかと云ふに先づ石器時代の人間が段々こちら(千島)へ移つて來て居るのではあるまいかと云ふ疑ひを起して、擇

ヒチュコック氏

コロボック

蝦夷アイヌの口碑



擇捉島紗那河の堅穴

黒き回及び人の立つ所の石器時代堅穴の跡なり

捉まで參つたのであります、

其前に御話申して置かなければならぬのは、北海道に遺つて居る所の是等の石器時代の遺跡と云ふものは誰が遺したのであるかと云ふことに就ては是は議論があるのであります、併しヒチュコック氏であるとか、或はミルン氏であるとか、坪井博士とか云ふ人は、一樣にアイヌの傳ふる口碑を信ぜられて、是はアイヌ以外の人間が遺した、即ちコロボックルと云ふ人種が遺したものであると云はれて居る、之に反對して居るのは小金井博士であります、其他はコロボックルを信じて居るやうであります、北海道のアイヌは是等の堅穴及び堅穴附近から出ました所の土器とか骨器とか云ふものに就てどう云ふ事を言ふて居るか云ふに、我々以前にコロボックルと云ふ人間があつた、是等は土中

第八章 北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一七九

人類學教室所藏寫眞(著者撮影)

を掘つて住居とし、さうして石器や土器や骨器などを使つたのである、我々がこちらへ来るに従て、種々な衝突をしてさうして何處へ行つたか分らなくなつて仕舞つた、先づ詳しい事を申し上げたならば段々ありますが、要するに意味はさう云ふのでありますから、ヒチユコックであるとか、それからランドルと云ふ人とか、ミルン氏などは此話に就て北海道で手掛がないから、擇捉とかシコタンとか云ふ所へ渡つた譯であります、

其中でランドル(四)と云ふ人は書工であります、此人は北海道を餘程歩いた人であり、此人は斯う云ふ疑ひを起した、北海道に遺つて居る石器土器と云ふものは、どのアイヌに聞いても皆アイヌ以外のコロボックルが遺したものであると言ふから、段々考へて見るにアイヌが遺したものは違ふ、是はどちらへ行つた者であらうかと云ふ疑ひを起した、既にミルン氏が亞細亞協會報告に書いてあることや、バチエラー氏が「日本のアイヌ」と云ふ本を書いた(五)それ等の本を讀んで或は現今シコタンへ來て居る千島アイヌが遺したものはあるまいかと云ふので、シコタンへ渡つて調べて見た、併しシコタンアイヌは言葉の上から言ふても、体格の上から言ふても、正しく北海道に住んで居るアイヌと同じ者で疑はしい所はない、唯脛骨が北海道アイヌに對し圓形を呈して居ると云ふことが異なつて居るのみである、兎に角さう云ふことを言ふて居る、殊にバチエラー氏(五)や或はミルン氏(一)などが、千島アイヌは穴居して居ると云ふと言ふが、我々の見た所では現今シコタンの土人は

ランドル氏

ヒチユコック氏
バチエラー氏

決して穴居して居るやうに思はぬ、是は全くアイヌと同一である、それであるからコロボックルの行先を調べやうと思ふならば、シコタンへ來て居る土人で求むる所はないと言つて失望して歸つた人であり、それからヒチユコックと云ふ人も幾らか其氣味でシコタンへ行つたらしいのであります、是も目的を達しなかつた、バチエラーと云ふ人は石器時代のことに付ては別に書いて居る物はありませんが、「日本のアイヌ」と云ふ本に(五)一頁だけコロボックルのことが書いてある、北海道に遺つて居る堅穴は、現今北千島に住んで居るアイヌが穴居して居る堅穴と同一である、さうして千島アイヌは北海道のアイヌに比較すると身長が短かい、髯が少ない、北海道の或アイヌは彼等を以て小人の殘物ではあるまいかと云ふものもある……以上はヒチユコックとランドル、バチエラー氏の話であります、

ミルン氏の調査
ミルン氏と云ふ人があつて(一)長く北海道に居りまして、斯う云ふことが好きで手を着け始めた、それからミルン氏に移つた、此ミルン氏は北海道で室蘭であるとか根室であるとか、各所の貝塚或は堅穴を堀り、石器土器等も大分採集せられました、さうして是等の土器や石器や堅穴などは誰が遺したものであるかと各所で聞いた、然るに皆な一樣にコロボックルと云ふ答の外、アイヌが遺したものであると云ふ答をしなかつた、そこでミルン氏はアイヌ以外の者が遺したのであると云ふ考を起した、然らばコロボックルなる者は、今何處へ行つて居るかと言ふ疑ひが起つた、ミルン氏は明治十一年に斯

第八章

北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一八一

う云ふ考を起した、現今話を聞くにまだシヨタンへ移らなかつた時でありましたが、千島の土人即ちクリルスキアーイヌが占守に居つた、占守には現今堅穴に住んで居る人間がある、是等の人間は道筋から言つても餘程面白い位置に居りますから、この北千島の土人が或はコロポックルの残り物ではあるまいかと云ふ考を起して、さうしてわざ／＼船に乗つて占守までいつたのであります、占守まで行つたのはどう云船に乗つて行つたか分らぬのでありますが、スノウと云ふ人の書いて居ります千島に就ての本(二)或は私が千島土人自身に付て話を聞いて見ると、スノーと云ふ人の持つて居る帆船に乗つて行つたやうに思はれる、明治十一年に占守へ行つた報告が亞細亞協會の報告(一)に載つて居る、併し唯だ僅かに一頁半位しか載つて居らぬ、唯彼等の風俗の有様の大躰及び住所の有様とか云ふことを書いてあるだけである、ミルン氏は北海道でも石器土器などを餘程研究されて、目の肥へた人でありますが、一向占守で石器や貝塚や土器を發見したことは書いてない、是等を以て見ると、ミルン氏が果して手掛りがあつたのであるか、無かつたのであるか、文章に依ると手掛りが無かつたらしい、併ながら斯ふ云ふやうなことを言ふて居る、北海道に居るアイヌとクリルスキアーイヌとはどうも少く違つて居るやうに思ふ、例へば北海道のアイヌは髯が多い、千島に居る人間は髯は濃いが短い、身長は北海道のアイヌに比すると小さい、それから頭の形が圓いと言つて居りますが、是は學術上測定器で測つたのでなく感情上で圓いと云ふと書いたのでありますから、學術上で見ることは出來ない、此三箇

小金井氏の
説

條が北海道のアイヌと千島のアイヌと躰質上違つたものであると云ふ論據であります、そう云ふ風にミルン氏は言ふて居りますが、兎に角手掛りがなかつたらしい、

坪井氏の説

今まで申したのは外國人でありますが、さて日本人の方はどうであるかと云ふに、小金井博士(七)は北海道に遣つて居る石器土器は、現今のアイヌの祖先が遺したものであるからコロポックルと云ふことを頭に入れる必要はない、と云て居る、坪井博士の説(八)は、どのアイヌに聞いて見てもコロポックルと云ふことは傳へて居る、是は架空の話でない、さうしてアイヌと衝突をして千島を傳つて何處かへ行つたらうと云ふことを言ふて居られる、坪井博士の説と丁度ヒチュコック、ミルンなどの諸氏との説とは似て居ります、先づさう云ふやうな風になつて居る、併ながら日本人で北海道を離れて調べたと云ふ人は餘り聞かない、唯當協會の雑誌に石川貞治さんの千島の報告(十一)及び人類學會に通知して呉れました石川さんの擇捉附近を歩かれた報告の外、日本人がかかる目的を以て擇捉から北の方へ行つたと云ふことを聞かないのであります、

石川氏

余の調査

先づ今までいふたのは北海道に付ての問題です、私が今度参りましたのは此北の方で(千島群島の地圖を示して)之に付て果してドゥ云ふ事實が此に存在して居るかと云ふことを、是から御話申さうと思ひます、


御承知の如く北海道から出ました所の石器時代の遺物は、國後、擇捉、色丹など、(南千島)皆同じ風


第八章

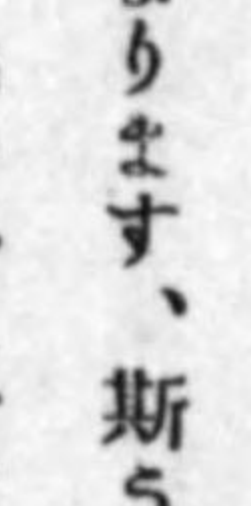
北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一八三

北海道及び
南千島諸島

てありましてドゥしても同一人種の者が遺した者としか思はれぬのであります、是まで其北の方の石器に付て、精しい報告のあることを私は見ないのであります、私は一昨年武藏艦が占守に参るに付て便乗して其目的を有つて参りましたが、私が占守、ポロモジリなどに付て調べると、此處に石器時代の遺跡が存在して居ります、乃ち占守のモヨロツプ、それから陸を傳はつて此方へ参ると、此所にベツトウボーと云ふ所がある、此所にも石器時代の遺跡が多く存在して居る、道々見るに貝塚であらうと思はれるものが大變此間に見える、さうして此邊は至る所に堅穴の跡がある、明治十七年までに千島土人が住つて居りました其當時の儘の堅穴が残つて居るのであります、又それより古いものもあります、此形はドゥであるかと云ふと







こんな形である、是が崩れると圓味を帯びて守、ポロモジリ殊に占守で見るのが便利であります、此の事に付ては堅穴に付て御話を別にする積てありますから茲には精しく述べません、先づ斯う云ふ堅穴がある、此附近を掘ればどんなものが出るかと云ふと、此所から出る品物は大鉢持つて來たのであります、斯う云ふやうなものが此中から出る(石器、土器、骨器を示して)それから堅穴の附近に斯う云ふ丘があるとすると、斯う云ふやうに掘込んで居る所がある、此處に貝塚がある、貝塚を掘るとこんなものが出る、兎に角北千島の方ではまだ是れまで採集した人がありませんから、中々斯う云ふものが豊富にある、此の處には石の斧であると

か或は石の鏃であるとか骨で拵へた鏃、それから土器、こんなやうなもので、貝塚の貝は今日持つて参りませぬが、種々な物があります、又臘虎であるとか、鯨の骨、孤の骨、馴鹿の骨、鷲の骨、こんなものが出る、馴鹿の骨は占守、其他千島諸島に居るものではありませぬから、一葦帯水のカムチャカあたりから取つて來たものである、カムチャッカと占守との間は僅か三里位でありますから、小さな船で行くことが出来ます、其中に不議なことがあります、斯う云ふやうなガラス玉が混つて出る、又ははフラスコの空瓶の破片であります、之れを以てこんなやうな風に矢の根を作らうとして居る、是等を以て考へて見ると是から次に御話しますが、北千島に存在して居る石器時代の遺跡と云ふものは、年代を大概考へることが出来る、ガラス瓶なりロシヤ玉か出ると云ふのが一つの事實でございますから、時代は考へることが出来る、御承知のごとく露西亞人が占守、ポロモジリ等の北千島を知つたと云ふのはどの位であるか(九)一千七百七年、今から百九十四年以前に日本船がカムチャッカの南岸に漂着した時に、始めて千島のあることを知つたのであります、それから千七百十一年にアンツィヘル、ゴズ非ルスキーと云ふ兩人がカムチャッカで暴動を起した、さうして上官のアツツラソウと云ふ者を殺した、さうして己れの罪を償ふが爲に多くのコサツク兵を率いて探險を企てるとを歎願して其許しを受け、即ち千七百十一年に此占守に渡つて土人を征服した、其勢ひに乗じてポロモジリに移つた、是が始めて占守に参つた初めです、是等を以て考へて見たならば、此ガラス玉やフラスコ瓶の年

代はそれより以前に溯るとは出来ないであります、夫て是等を遺した人間はどんな者が遺したかと云ふ事は先づ後の御話であります、どうしても年代は大概露西亞人が侵入した前後のことで、即ち百九十年、元祿以後のことであると云ふことは考へられる、それと共にどんな人間が遺したかは後に話すとて兎に角元祿前後までは明かに北千島には石器土器骨器を使つた人間が居つたと云ふことは考へることが出来るのであります、さて北千島に遺つて居る遺跡遺物は、斯ふ云ふ種類であると云ふとは御分りになつたのでございませうが、是等はどうか云ふ人間が遺したものであらうと云ふことを是から御話しやうと思ひます、是は大問題で餘程御説があらうと思ひます、今日御出になつて居る方々も、之に付て御説があらうと思ひます、是は十分御判断を願ひたい、是等は私の如き者が御話をする譯のものではございませぬが調べて來た其義務として御話をしやうと思ひます、

北千島の土人の方には果してコロボツクルの話があるかどうかであるか、是は餘程研究しなければならぬこととあります、私が軍艦で色丹へ参りました時に、グリゴリーと云ふ六十に近い老人を軍艦に乗せた、是れは私の調査の助手にせんが爲めです、軍艦が擇捉の留別に着きましたから之を伴れて上陸した、御承知の如く近藤重藏などと云ふ人が参つた時は擇捉島は極開けなかつたのであります、現今の擇捉は中々北海道内地と違つて、或點に於ては開けて居る、アイヌなどに至つては北海道のアイヌより開け方の度が酷いのであります、それでありますから擇捉のアイヌの風俗や色々のとを見やうとする

擇捉島アイヌのコロボツクルの口

のは餘程困難であります、殊に雜種になつて居るものが餘程多い、躰格の調べに於ても餘程不便を感ずる、留別などと云ふ所も餘程開けて居るのであります、アイヌを求めることは餘程困難であつた、然るに幸にして二人のアイヌの女を得た、此中の一人の八十程になるお婆さんにコロボツクルの話を聞いた、其時に斯う云ふ話をした、

蝦夷アイヌの居住地

千島アイヌの居住地

トイセクル

御承知の如く北海道に居りますアイヌと國後擇捉までのアイヌとは同じものと見て差支ないのであります、言葉の上、風俗習慣の上から申しても、全く同じものであると考へられる、これに反して露西亞と日本とが千島と樺太とを交換せない以前には、北千島の土人は千島の北部の諸島を始終往來して居つたのであります、要するに此千島の人間の生活して居る區域は、ラサワ島以北カムチャッカ以南、斯う見て差支ないものであります、そこで擇捉のアイヌに聞くに昔トイシエクル Toi-shie-kuru と稱する人が擇捉に住つて居つた、*U* はアイヌ語の土で *shie* は家 *kuru* は人と云ふとである、即ち土の家(竪穴)に住つて居る人間と云ふ意味である、彼等は我々の今日着用して居るアッシを着すれば土地をスリスリに行く程小さな人間であつた此、人間の口の周圍及び手に入墨を施して居つた、併ながら最初は口に入墨をして居るとか、手に入墨を施して居るとか、身軀が小さいと云ふやうな事は分らなかつた、始終隠れて來ては窓から品物の交換をして居つた、或時若者がどうか云ふ人間であらうか見てやらうと云ふ考を起して、或夜のこと彼等が交易に來てアイヌの家の窓から手を差入れた所を、アイヌが寄り集て

第八章

北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一八七

南千島アイヌの口碑は北海道のものなり

北千島アイヌには更にコロボックルの口碑なし

此者を引込んで調べて見ると、極く小さい人間で、口の周囲及び手に入墨を施して居る女であつた、所が大變泣出して餘り可哀想になつた爲に之を家に歸してやつた、それから家に歸つて此事を友達や兄弟父母又は一村の者に話しましたが是は非常に失禮なことであると云ふて、遂に何處へ行たか分らなくなつた、我々アイヌが今日口や手に入墨をすると云ふのはトイセクルから習つたのであると云ふことを言ふて居る、もう一人のアイヌも同じことを言つて居る、是等は北海道のアイヌが言つて居ることゝは違はぬ、それでございますから擇捉アイヌ北海道アイヌも言つて居ることは同じである、さて尙一步進みまして千島のラサワから以北の土人はコロボックルに付てどんな話を傳へて居るかと云ふに、彼等は斯ふ云ふことを申して居る、コロボックルのことは聞かぬ、我々以前には穴の中に住んで土器だとか石器だとか云ふやうなものを使つて居つた人間のことは、昔から話しに聞いたとはない、我々は昔の先祖より或は臘虎を取り或は狐を取つて生活して居るのであるから、我等より外に以前に人間が居たと云ふとは昔から話に聞いたことはない、我々が知つて居る人間は、南にヤングル即ち蝦夷アイヌがあると云ふことは知つて居る、又蝦夷人の南の先にはシーシャム人があると云ふことを知つて居る、シーシャムは日本人のことで、又北の方にはカムチャツカの土人であるカムチダールが居ると云ふとを知つて居る、それから露西亞人が近頃入つて來てからカムチャツカの向ふにコリヤークと云ふ人間が居ると云ふことは聞いて居る、是は露西亞人から聞いたのです、一方にはアリウトと云ふ人間

神話

が居ると云ふことを知つて居る、其外に人間があると云ふことを知らない、又我々が北千島に住んで居つて我々の以前に人間が居つたと云ふことは知らない、斯う云ふことを言つて、コロボックルの話のないのであります、私の考では彼等は北千島に長く住んで居つたと思はれる、其證據には固有の神話があります、此神代記と云ふものは容易に作れぬものでありまして、あの山はどう云ふ神様が降つた、あの岡に我々の神様が降つたと云ふ……是等は神代記の所て他日別に御話をする積りてあります、がそれ等のものが残つて居る、以上に依つて見たればコロボックルの口碑は所謂ヤングルの口碑です、北海道の全道及び國後擇捉までの間に傳へて、所謂蝦夷アイヌに傳へて居る昔話であつて、北千島に住する土人は此話は知らぬ、是等はコロボックルに付ての口碑であります、然らば北千島に残して居る是等の石器や土器や或は骨器、堅穴に付て、千島土人はどう云ふことを言ふて居るかと言ふことを、是から御話申さなければならぬ問題でございます。

北千島アイヌの口碑

此古物遺跡に付ては千島の土人は疑つて居らぬ、何故疑つて居らぬかと言へば、自分の先祖が残したものであると云ふ、此事に付ては精しい話があるが、先づこの御話から致しましやうと思ひます、千島の土人は此千島に残つて居る堅穴であるとか、或は土器であるとか、石器であるとか、骨器であるとか云ふものは祖先が造つたものであると云ふて居ります、石器に付て斯ふ云ふ話を言ふて居る、昔は鐵が無かつたから石を以て道具を造つた、ポイナムカル（ポイは石ムカルは斧）を以て道具とし

石器

第八章

此千島に存在する石器時代遺跡遺物抑も何種族の残せし者歟 一八九

た、このポイナムカルに二つ種類がある、ポイナムカル、是は石の斧であります、一つはアンマアイ、アンジと云ふものは日本で謂ふ所の黒曜石に當る、アイは箭根である、アンジアイは矢の先に付ける黒曜石の鏃と云ふことであります、石斧はエツシユエンと云ふ石を以て造つた、併ながら惜むべきことに此の製法は傳はつて居らぬ、それから今日尙ほかゝる比喩がアイヌの中に残つて居る、"Poinamu-karu nishupe ashinka shiri tinku." 斯う云ふことを能く言ふて居る、其意味は石斧で木を削つて大變困難をしたと云ふのであります、自分の細工が漸く出来上つたと云ふ意味を言ふのである、餘程面白い言葉が残つて居るではありませんか、併ながら石器を造る外には傳はつて居らぬ、

次には骨器であります、此骨器に種々ある、先づボニーケオイと申しますものがある、骨の斧であります、(實物を示す) 是は實物を示して急に造らせたのでありますから、旨くは出来ませぬが、是は骨器であります、木を割る爲に用ゐる楔である、其の骨の物價は鯨の骨であります、これと同一なる骨斧は遺物として又出る、もう一つはアイビ(箭根)であります、是は用ひ方が分つて居ります、千島土人は此ことをアイと申します、これは鯨の骨で出来て居る、チロスと云ふ骨柄が付き、これに木の柄が又附て之に鷲の羽根が附いて居る、向ふへ突刺つて是だけ残る、(先の骨鏃の所、即ちアイだけが残る) 現今は餘程變りましてアイが銅になつて露西亞から渡る、或は北海道の蝦夷アイヌが持つて参りました所の鐵で作つて居る、しかしアイビだけが尙ほ骨で出来て居る、もう一つ是は斯う云ふ風に差込ん

ただで、此間に挟んで、是が兩方削つてありますが、こゝに鯨の筋を以て巻いてある、是等は大學に土俗品として實物がありますから、何時でも御覽に入れることが出来るのであります、是等も矢張其類であつて、是等は臘虎などを取る時分に向ふに紐を付けて置いて投げますと紐が残るのでありますから、引いて來ることが出来る、是等も大きなアイビでありまして、大きな物を取る時分に用ひる、是等は今は色丹の土人が鐵若くは銅で造つて居る、是は露西亞人が占守、ポロモジリを通つて千島へ入つて來たと共に斯う云ふことに變つて來たのである、それから次に出る遺物は是は餘程面白い、斯う云ふものが矢張り貝塚から出る、是はクツクルケイシと云ふもので、是は鯨の骨で作つてありますがこの品物は現今色丹で用ゐて居る、其使用は即ち帶留であります、是等は餘程のお婆さんから貰つたのであります、斯う云ふものは段々無くなつて仕舞ふ、それからこんな鷲鳥の骨を切つてこしらへた物も貝塚から出る、是は何に使つたものであかと云ふと、是は針入れてあります、現今はカムチャツカから西伯利亞風の針入が來まして、斯う云ふことはやりませぬ、昔風のは斯うして是はエトピリカの嘴であります、斯うして付けて置く、是等は是と同じ物でありまして、此所に針を差込んで置く、其針は同じく骨で狐の骨を以て作つたさうです、先づ是は骨器の類であります、次には土器であります、(實物の使用法を示しつゝ)

土器の類は又面白い、千島から出ます土器は始めての採集だらうと考へて居ります、ミルン氏も採集

せず、他の御方も此方には御専門でないから御調べにはならぬと思ひますが、斯う云ふ土器が出る、
(圖を書るて實物の破片と對照しつゝ)

こんな風な形で内側に耳が附く、斯う云ふ土器が貝塚を掘ると出る、模様も何も無い、極めて開けぬ仕方の土器が出る、此土器に付ては石器のことよりも精しい話が残つて居る、それは一たび北海道のヤングルから日本の鐵鍋を輸入し始めたり、露西亞の鍋を輸入し始めてからと云ふものは、専ら是等のものを用ひることゝなつたが、彼等は其前には土を以て器物を製造して居つた、昔千島土人は北海道のアイヌとどんなものと換へたかと云ふに、鶯の羽とか臘虎とかと交換をしたのであります、其前の土の器はどう云ふものであるかと云ふと、是は七十以上になる老人の話であります、此製作は粘土、向ふの言葉でトイ、それから砂(オッター)此二つを合せて水を和して煉るのであります、之にノツカンキと云ふ極く繊維の細い草であります、之を切つて入れて混ぜるのであります、之を上から斷割つて見るとこんな風のもので出来て行かうと云ふのであります、此事を千島の言葉でトイカリウと申します、トイといふのは土で、カリウと云ふのは輪です、土の輪を拵へて螺旋状のものを拵へる、そうして中に水を入れて置く、十分此土器が出来上つたならば、其器の中に水を入れて圍爐裡の中へ置きまして、四方から火を點じて置けば、此中の水と云ふ物は次第に沸騰して蒸氣となつて、少時間にして水が少なくなつて、水が乾いた時を待つて取出す、さうして空氣に晒して置けば、全く土器

は出来上るのである、斯う云ふので、土器の製作に付ては石器と違つて精しい傳へが残つて居る、そうして土器を作る原料はどうであるかと云ふに、占守に付ては昔からポロンスキイ氏の千島誌(十)などの話にありますカムチャッカの湖から飛て來たと云ふかのアラキド島から土器の原料を取つて來たと云ふこととあります、ラサワではモツリケシと云ふ所から土を取つて來た、斯う云ふことを云ふて居る、さうして此製作は一定の職業ではなくして、各自一般に造つたものである。併し之に従事するのは主として女の仕事であつて男は與らなかつた、ポロモジリの女は此土器を造ることは中々妙を得たと云ふ話がある、さうしてラサワの女は實に下手であつたと云ふ話である、此上手下手と云ふのは、要するにノツカンキと云ふ草の入れ加減であつて、ラサワの女は餘り細かく刻んで入れるから下手であつたと云ふ、それから千島の土人か造つた土器はどんな種類であるかと云ふと、二つしか種類が無いらし、一つは土鍋、即ち千島の言葉でトイシユ、一つはトイサラ、即ち土の皿、此二つであつたと云ふ、土の鍋には其内側に二つの耳があつた、何の爲に内側に耳を拵へるか云ふに、斯う云ふので、こゝに土器があるとする、耳が斯う云ふ風にある、之にムーリと云ふ草で繩を拵へて掛ける、さうして堅穴の中の圍爐裡の上に之を置いて火を燃やす、圍爐裡の上に自在のやうな物で掛ける、併ながら此土器が下手であるから、此中に臘虎であるとか、大きな動物や魚などの肉を入れて煮る時に、之が破壊して仕舞て困つたことがあると云ふことである、重量に堪え兼ねるから仕方がないと云ふこと

第八章

北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一九三



・人類学教室所寫眞（著者撮影）

穴堅の上丘ブツロヨモ島守占

を言ふて居る、是等を考へて見たならば、北千島から出る十器は決して過去のこととなくして、現今の話に依つて傳はつて居る、是で彼等の遺したものであると云ふことは充分に分る、

其次の大問題は堅穴であります、是は誰が遺したものであるか、是等は色丹に現今来て居る土人と關係が有るかどうかと云ふと、彼等は堅穴に住んで居りますから、是等と關係の有るとは分つて居ります、堅穴の事は現今土人が堅穴に住んで居るのでありますから、最早疑ふ必要は無いと思ひます、彼等は矢張り古き穴を以て自分の先祖が遺して居ると云ふことを言ふのみならず、堅穴に新舊のあるのは時代的に繋がつて来て居ると云ふことを是で考へることが出来る、此處にありますのは今再び土人を北千島に歸さうとして、土人の二三をボロモジリにやつて作て居る堅穴です、此處にあるのは十七年の頃にやつ

て居つた堅穴、これは親父の代のもの、其れより古きもの斯う云ふのが非常に多い、是等は首く繋がるのであります、疑ふことはなからうと思ひます（寫眞を示しつゝ、）

以上の話に依つて考へて見ますと、現今北千島に遺つて居る遺跡は、最早他に人間を求めする必要がないのであつて、現今色丹に住んで居る占守から移つて来た北千島アイヌの遺したものであらうと云ふことは、最早疑なからうと思ひます、私はさう考へて居る、さうして見ると、茲に一つの疑ひが起ると云ふのは、北千島に遺つて居る石器時代の遺跡と、擇捉及び北海道に遺つて居る石器時代の遺跡とは同じ物であるか、どうであるかと云ふことが大切な問題であらうと思ふ、私が今日まで見た所では、擇捉から南、色丹、國後、北海道全道のもの、ヲサワから以北、占守までの間のものとは、まだ一致することが出来ぬのであります、少し違つて居るやうに思ふ、御承知の如く石器などは似て居るとしても偶然の類似がありますから先づ取除けとしても、土器は人間の意匠デザインが入つて居りますから大に考へへの據となる、是は北千島より出る土器であります、内側に耳があつて模様がなく、極く粗である、是は色丹の堅穴を掘つて得た所の土器であります、是には斯う云ふ模様がある、焼き方が餘程違ふ、この色丹から出る土器は北海道、擇捉、國後あたりから出るものと同一である、決して間違は無いのであります、是等から考へて見たならば、北海道及び擇捉までの間の石器時代遺物と北千島の石器時代遺物との間には未だ確然繋がり十分付かぬやうに思ふ、北千島と南千島とを連接せるウルップ島に

南北千島遺跡の類似

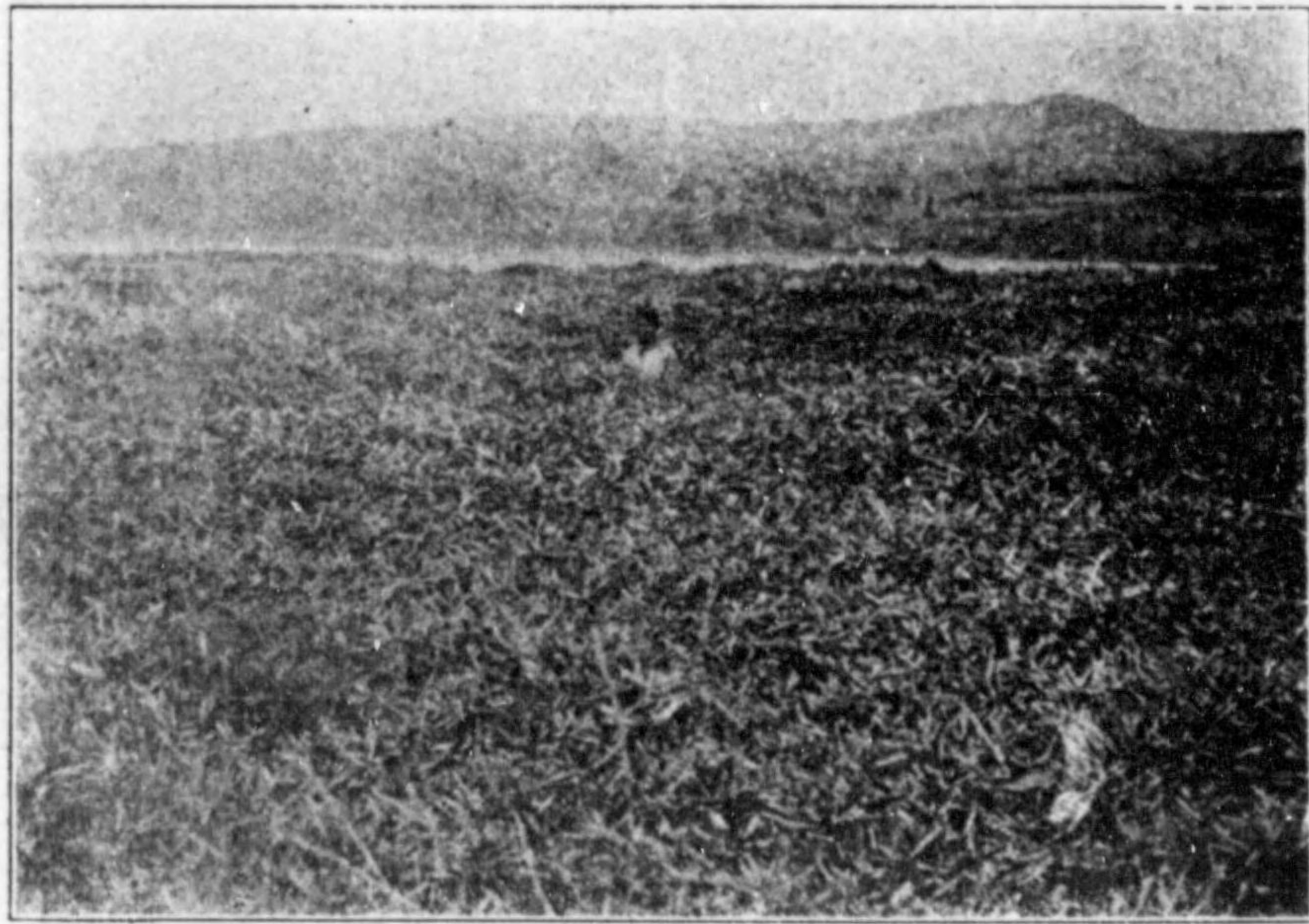


人類學教室所藏寫眞 (著者撮影)

占守島モロツ丘の上の貝塚及竪穴

は二度参りましたが、天候が悪くつて長く居る暇がなくして十分調べることが出来なかつた、ウルツプであるとかシムシルであるとか云ふのが、以上二者の中間に立つて居るから將來望みの有る所で、どう云ふやうになつて居るか注意を願ひたい、併し現今の所では繋がらぬと思ふ、北千島には一種固有の石器時代の遺跡があつて、擇捉から北海道の間には又一種の固有なる石器時代遺跡がある、是は小區別であるか知りませぬが兎に角二派ある、併し一方から考へて見たならば、北海道、國後、擇捉、色丹には竪穴がありまして、竪穴の附近に貝塚があつて、さうして石器も出れば、土器も出る、それから骨器も出ると云ふやうなもの一つの事實です、又北千島に竪穴があつて、貝塚があつて、石器も出る、骨器も出る、又土器も出ると云ふことも一つの事實です、若し將來擇捉までの所の土器と占

コロボツク
の口碑は
北千島に
しな



人類學教室所藏寫眞 (著者撮影)

第八章

北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一九七

色丹島竪穴遺跡

(人立つ所の竪穴)

守やボロモジリ等の北千島の土器との間の中間物が出たならば、私は直ちに北海道及び擇捉までに石器時代の遺跡を遺したるものは、現今の色丹アイヌの祖先であると云ふと言ふに躊躇しない考です、是が十分繋がるかどうかであるかは實に今後の一大問題です、さうして是までのミルン氏であるとか、ランドル氏の如きは北千島にコロボツクは行たてあらうと云ふのであるけれども、私は斯かる口碑を聞かぬのである、それでございますから所謂コロボツクなる昔語は擇捉で切れて居ると言つて差支ない、是から先は少しも影は無い、さうして見ると、コロボツクは縦し一つの人種とした所が、北へ行つた形跡は見えないのであります、此處は餘程注意すべ



人類學教室所藏寫眞 (著者撮影)

將來の希望

この堅穴は新しきものなり
 ヤコフー
 行が著者
 渡航前年
 に越年せ
 しものな
 り
 堅穴
 と比較す
 るに便な
 ればこれ
 を此處に
 掲ぐ

きてあらうと思ひます、
 兎に角アイヌの一種たるクリルスキ、アイヌが會
 て石器時代の人間であつて、堅穴に住み土器を使
 つたものであると云ふことを、私は始めて諸君に
 御話を申して置かう、そして其年代はあまり古く
 はあるまい、其は遺跡からガラス玉やフラスコ
 瓶などの出るのて知れます、且つ彼等は其フラス
 コで矢の根を作つた形跡もあります、それから北
 海道にあるものは別として置きますが、此コロボ
 ツクルと云ふものが、よし一つの想像的の人間て
 ないにしても、是までの人が考へて居る如く、北
 へ行つたものでないと云ふことは、以上に因て知
 れる、唯將來私の考へるのは唐太の調べが十分付
 いて居らぬ、唐太から掛けて黒龍江の下流ニコラ
 エウスクであるとか、あの邊の調べが十分付いて

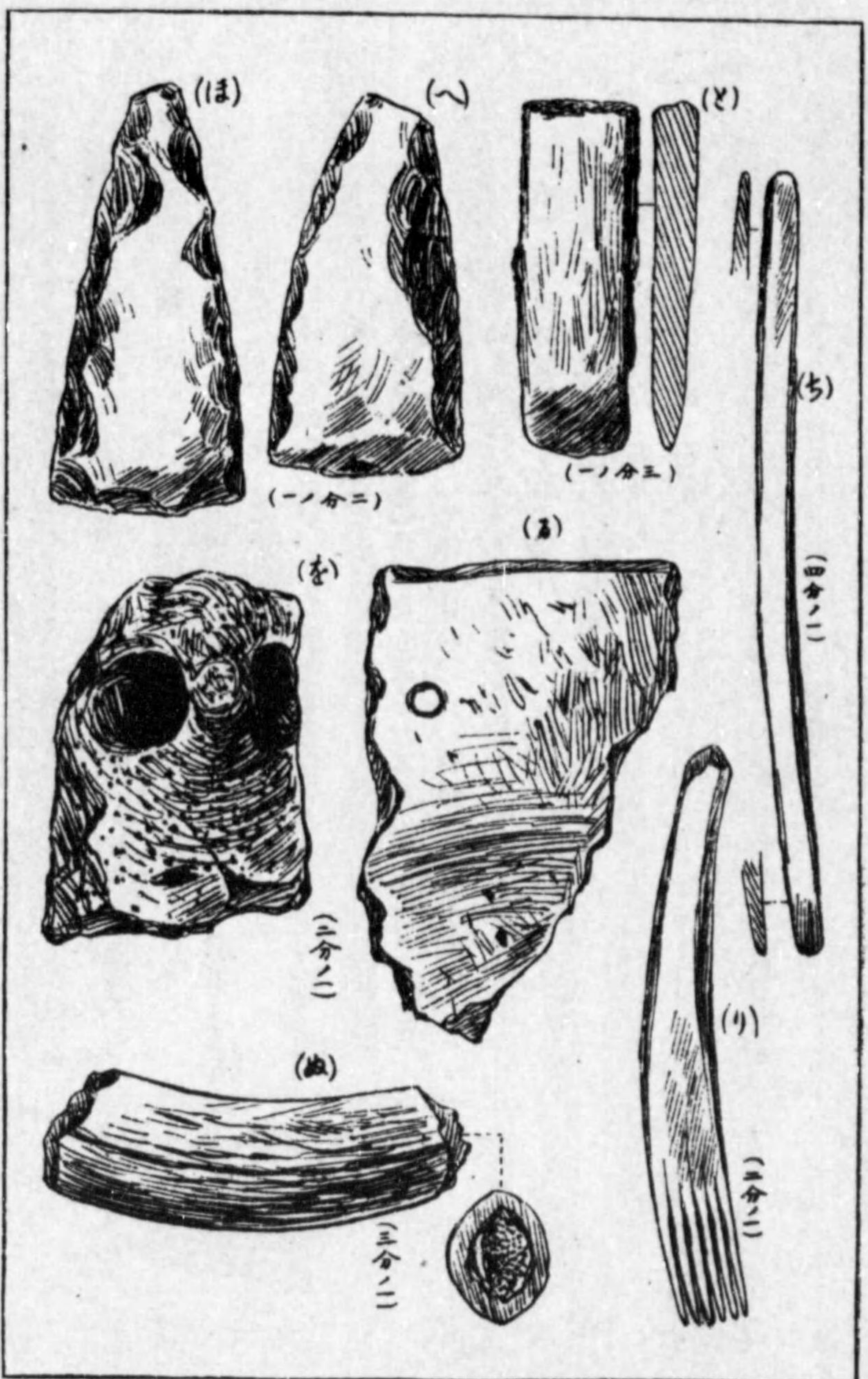
居りませぬから、其調べを十分しない中は北海道の方のことは調べが付かぬと思ふ、私は千島の北の方へ行つては、最早北海道的の石器時代の調査は不必要であらうと思ふ、なぜならばあちらには斯様な固有なる千島アイヌが遺したものがありませんから、不必要であらうと思ふ、私は斯う云ふ意見を有つて居りますから申し上げます、之に就ての参考書は左の通り

参考書

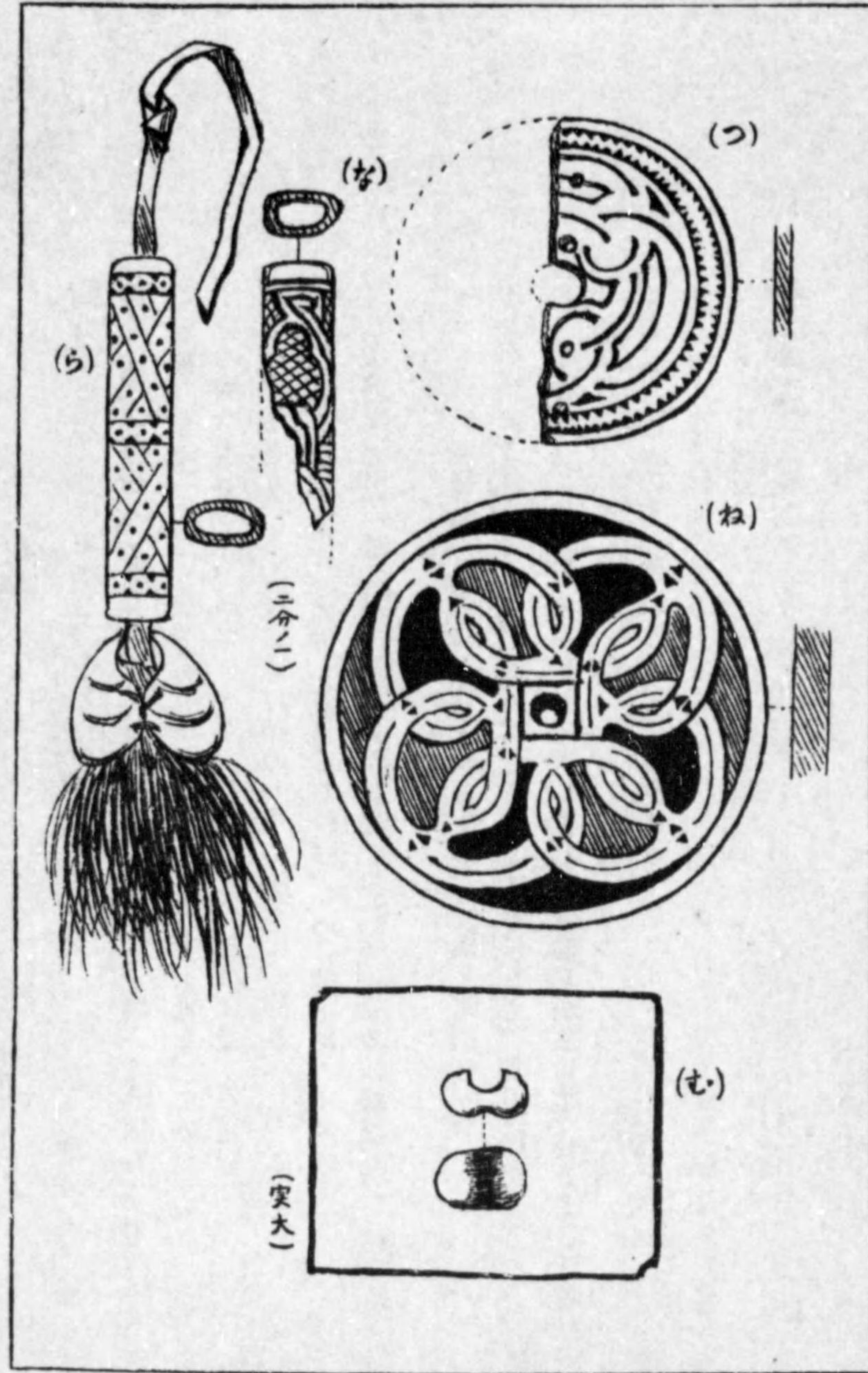
- (一) ミルン氏 Notes on the Koro-pok-guru or Pit-dwellers of Yeso and the Kurile Islands.
- (二) スノウ氏 Notes on the Kurile Islands.
- (三) ピチユロツク氏 The Ancient Pit-dwellers of Yeso.
- (四) ランドル氏 Alone with the Hairy Ainu.
- (五) バツチエラル氏 The Ainu of Japan.
- (六) グリム氏 Beiträge zur kenntniss der Koro-pok-guru auf Yeso bekerkangen über die nord Shikotan Ainu.
- (七) 小金井氏 Beiträge zur Phylsichen Anthropologie der Ainu.
- (八) 坪井氏 コロボツクルに關する諸論文
- (九) キリルロフ氏千島及其沿革(露文)

第八章 北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の殘せし者歟 一九九

- (十) ボロンスキー氏 千島誌(外務省藏)
- (十一) 石川氏 千島巡檢雜記
- (十二) ミンン氏 Notes on a Journey in north-east Yezo and across the Island.
- (十三) ミンン氏 The Stone Age in Japan; with Notes Geological Changes which on Recent have taken place.
- (十四) モールス氏 大森貝塚篇(英文及日本文)



「集案者著」 品 裝 新 在 改 學 預 人 學 大 科 理 學 大 國 帝 京 東



「集採者著」 品藏所室教學類人學大科理學大國帝京東

- (か) 同貝塚發見、骨鏃、これは二つよりなる、即ち矢の根と、其矢の根をさし込める柄是れなり、柄の下部は木の柄にさし込む様なり居れり
- (よ) 同貝塚發見、骨鏃、これは前の(か)と異なりて、二部の一所に相合し居れるもの、
- (わ) 現今使用の箭、これは千島アイヌの今も作れるものにして、即ち鏃は骨よりなり、木の柄に附し、其先端には鳥羽を附せり、この製法は全く(か)(よ)と同一のものなれば、これにて其遺物の同一種族の手になりしことを推知せらるべし
- (れ) ベットボ貝塚發見、石鏃
- (た) 同貝塚發見、左に圖せるものは、骨よりなり、下は木の柄に附着し其上の開きたる所に、石鏃をさし込むなり、其使用法は右の圖にて知るべし
- (そ) 骨匙、同貝塚發見、骨を以て匙を作らんとし、其骨質の堅きを爲め、中途にてとどめたるもの、如し、これは柄の所より折れ居れり、この形状より推知せば、當時の石器使用人民が露西亞製の匙を見て模作せんとしたるもの、如く見ゆ、この事實は露西亞製ガラス玉とともに大に露人侵入當時のものたるを證明するに足る、

- (つ) 同貝塚発見、骨に彫刻し、中央孔を開きたるもの
- (ね) 現今使用の帶留め クツクルケシと稱し、今尙ほ千島アイヌはこれを使用せり、これは中央の孔にトツカリ獸の皮紐を通し、この紐は腰の周に巻きつけ、クツクルケシを前にし、これに残りの紐を巻きつくるなり、この仕方は口繪の女子の風俗にて知るべし、この(ね)はまさしく(つ)と等しきものなれば、(つ)は千島アイヌの手になりしものなるを推知せらる、殊にこれに彫刻せる紋様又互に相同じ
- (な) ベットポ貝塚発見 鳥骨にて作りたるもの、紋様を彫刻せり、
- (ら) 現今使用針入れ これは鳥の骨にて作りたるものにして、其上に紋様を彫刻せり、用法は針入れにして、針はもと狐の骨よりし、この針入れの中にさし込み、胸にかけたるものなり、この(ら)は全く(な)と同一のものなれば、(な)は固より千島アイヌの手になりたるものなるは明かなりとす
- (む) ベットポ貝塚発見、ガラス玉、色は紺色よりなれり、このガラス玉は露西亞玉の古きものなり

第九章 北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎

明治三十四年十一月 東京人類學會雜誌轉載

北千島に粗造な内耳の土鍋や、土皿の石器骨品とともに存在し、しかも是等の遺物が現今色丹に來て居るクリルスキーマイヌ祖先の手よりなつたものであることは、私が「北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑も何種族の殘せしもの歟」て述べて置きましたから茲には別に記しません

さてこんな北千島の土器は、北千島以外に果して存在するであらう乎、否乎、これは大に研究すべき問題であらう、私は此考て數種の材料をあつめた所、左の如き事實を得ました、因て私は先づ最初に此事實を列記し、次にこれに付て聊か述べたいと存じます、

清水元太郎氏から説明を附し、書學紙に畫て送られた北海道石狩國札幌郊外附近(西郊)発見土器の圖がある、これは次の通てあります、

此土器は内部には二つの耳があつて、外部は黒く燻つた煤の薄層が出來て居る、別に模様も何も施した跡はなく、實に粗造なる製作である、これは一見通常の貝塚土器と異なつて居る事が直に知れる、これと等しきものは尙ほ北見國枝幸郡枝幸村からも出て居る、これは左圖の如くである、この事について坪井博士は東京人類學會雜誌第三十七號に「四足獸の浮き模様ある貝塚土器及び粗造なる内耳の土

第九章 北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎

二〇一

鍋」と題し記載せられた事がある。

其時坪井博士はこれに付て左の如く附言せられた(はの縮圖参照)。

一は粗造なる土鍋で其形状は卷末圖の通りでございます、甲の大きさは圖の通り厚さは三分、一鉢に表面の方に膨れて居つて其彎曲て推せば之は直徑一尺程の土器の破片と思はれます、土質は粗く土中には少量の雲母碎粉交り表面は黒み掛つた薄樺色表面は鼠色掛つた薄樺色、製作は素焼手捏ねて内外共に黒く穢れて居ります、外の黒みは焚火の油煙、内の黒みは煮物の糟、此土器の鍋たる事は一見して明かに知れます、形は甚だ無器用な半球で直徑平均五寸高サ大畧三寸厚さは三分程の所もあり五分程の所もあり、縁は高低の爲に不規則な波形を作つて居ります、内側の相對する所に一對の耳の有るのは紐を通ずる爲で、故らに此位置を、撰んだのは焚火の爲に紐の焼けるのを避けたのでございませう、此器は前の破片に比ぶれば土質は細くございませうが細工は甚だ粗で土中には雲母の破片は更になく小石が交つて居ります、私の見る所では完全の方は從來類品を見た事がござりませんから斷言は出来ません、

以上の札幌郊外から出た土器と枝幸から出た土器とは同一類のものである、坪井博士はこの土器に付て從來類を見ずと記されたのは尤てしよう、しかし何ぞ知らん、此種の土器は北千島の特有である、北千島の石器時代の土器は悉くこの種のものからなつて居る、

唐太島の遺物

唐太日記の文

私は以上二品を見るにまさしく北千島の土器と同一である、かゝる事實の存在して居る以上は、私は最早北海道本島にも北千島の石器時代遺物の存在を認めざるを得ざる事となりました、

北千島の土器はたゞに北海道本島のみならず、サハリン(唐太)島にも存在して居るらしい、唐太日記にこんな事が記してある、

夫れより一里計りにて字イナヲカルシと云ふ所に出る(注)此所本名チハホイナヲカルウシと云ふなるべし、柳の大木あり其傍に往來の土人削花を建て拜をなし行くとなり、其謂は昔此島に鍋の無かりし頃タコイに住する姥が土を以て始めて鍋を作り、東浦の土人に其製法を教へ夫よりして南濱より西浦の土人にも教へんと鍋を背負此所まで越し來りて風と過て破れたり、夫れより意の達せざるを思ひて此所にて病に罹り終に死せりと云へり、其跡を神に祭り置き、此邊の土人往來の時削花を奉りて數日の途中の食糧を絶さず越さんことを祈り誓ふとかや、如此土鍋を其島にて用ゐしこと昔々の赤本話の様に思ひ居りたりしが、此度丁巳鎮臺堀君御廻浦の砌にクシユンナイにて右に圖せし如き鍋を一枚土中より掘出せしとて、同所の土人献ぜし由にて持ち歸り給ひしを見侍り、余も始めて土鍋を用ゐし昔話を信じぬ(る圖参照)

タコイの姥の古傳は今しばらく置き、兎に角サハリン島の地中からも土器が出ことは明である、土器はこの説明によると「徑七寸餘、深さ三寸五六分、手作り厚さ凡三四分より五分もある歟なり、土至

第九章

北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎

クシユンナイの位置

北千島の土器の分布

北千島の土器製作使用の地が如し

りてあらく砂交りなり」とあり、これは全く北千島の土器である、クシユンナイは現在のコルサコフ附近で、露西亞のサハリン島地圖には Kushnu-kokan-nao と記するものが則ちこれで、位置は同島南端モルドウイノワア灣に流る、クシユンコタン河の河畔である、以上の數事實で判断を下せば、現今の所では北千島の土器の地理學的分布は、先づサハリン島の南端から始まり海程僅に十八里許の宗谷海峽を渡り、宗谷岬を少しく廻つて達する北見に至り、又一方は少しく距たつて札幌に至つて居る、此分布は尙ほクナジリ、エトロフの南千島を一足飛びに飛んで北千島、しかもカムチャツカ半島に僅か三里にして達せらるゝ占守島に至る、果して然らば材料はよし少ないにせよ、かゝる種類の土器が廣く分布して居る事はよく想像せられるのである、是迄多く北海道を旅行した人があつたが、かゝる種類の土器は所謂貝塚土器と異なて居るから、新しい物と考へ採集せなかつたものかも知れん、若しも此後この考へて旅行したならば、かゝる材料は獲るにあまり困難でないかも知れぬ、さてかゝる種類の土器は何人種が残せしものであらふか、これは私が北千島に存在する石器時代の遺物遺跡は抑も何種族の残せし者歟」で證明した如く、全く北千島に古來棲へるクリルスキアィヌの手になつたものである、かく同一なる遺物が北海道本島にもサハリン島にも出るとせば云ふまでもなく、これは明かにクリルスキアィヌと同一種族の手になつたものであらうと私は堅く信じて居る、札幌や、枝幸や、クシユンナイで獲られた土器は單にこれのみあげたのであるから、堅穴の關



北蝦夷圖説所載

唐太日記所載

北海道江刺ヨリ発見 土器 (三分二)

北海道札幌郊外ヨリ出タル土器 (三分二)

係、石器、骨器の共に存在して居つたか如何は知る事が出来ぬが、私は自から調査した北千島の事實から考へて見れば、其附近に堅穴があつて、石器や、骨器などと共に存在して居るらしい、余は未だ以上の地方を親しく實踐はせぬがどうしても石器と伴つて、所謂石器時代のものではあらうと思はれるのである、今北海道にかゝる種の土器が存在して居るとせば、此種の遺物は如何なる状態にて存するか、尙ほ通常の貝塚土器と如何なる關係を有するか、これは今後吾人の大に研究すべき問題であらう、茲に石器時代の人民をアイヌなりとせらるゝ論者があらば、此種の石器時代遺跡に注意せられたい、私は北千島の事實からは等の遺跡は確かにアイヌのものであると信じて居る、私は此事實からしてアイヌは曾て石器時代の人民であつて、しかも土器を製造し、堅穴に住むだと考へる、今日のアイヌの土俗は一步も二歩も進歩したものであらうと考へるのである、終りに於て尙ほ一言したい事がある、其はアイヌの土器を製造使用したとの口碑である、此疑問に向つてはクリルスキアイヌは明かに其製造使用したことを今に傳へて居る、又サハリン島のアイヌも土器を製造したらしい、間宮倫宗氏の「北蝦夷圖説」にはこんな事が記してある(い圖参照)

地夷製する所の土鍋あり、大低大さ六七寸にして形圖の如く、兩邊握耳なべの内邊に設くとなり、皮を以て製し繩にかへて用ゐるものを以て弦となし、火に焼切れん事を恐れて樺の木皮を纏ふこと圖の如し、

土鍋製造の事は林藏詳に此に載ることを得ず、夷言もと土鍋を指してトエシユと稱すれども島夷は是を忌みてカモイシユと云ひ、其の事實は詳にせざれども神鍋と譯す、

坪井博士もこの文を見て殆んど要領を得ぬと云れた如く、此文の意味間宮氏渡島の當時唐太アイヌが土器を製作使用して居つたのか、又單に口碑として残つて居るのであるか、此點は實に知れ難いが、よし之を當時製作使用して居らぬ一種の傳へとしても、この傳へは北千島アイヌの土器に付ての口碑と能く類似して居ります、此類似は決して偶然の者とは考へられない、殊に二者は人類學上より等しきアイヌである、この點から考へて見ればアイヌは曾て土器を作つて居つた事が明かである、今日北海道本島のアイヌは其口碑がなく、僅に文化文政の當時に唐太アイヌに傳へられ、又今日も北千島アイヌに傳へられて居るのであらう、北海道とてもよく其考へて調査して見たならば、或は少しく手がかりがあるかもしれぬ、曾て清水君の注意せられたヲタシユ Oshishu の地名の様なものもこれであるかも知れん、

近頃藤井秀氏は北海道利尻島にて發見せりとて、石器時代の遺物(石器、骨器、土器等)を東京帝國大學理科大學人類學教室まで持參されたり、余はこの遺物を見るに北千島のもの頗る多く殊に其骨器の如きは最も然りとす、例令ば骨器の内に箭根に附着せる骨柄あり、骨斧あり、何づれも北千島土人使用のもの等し

尙ほ友人大野延太郎氏が北見國宗谷岬附近にて採集せらるる材料中、骨斧あり、こは又北千島の

ものと同一なり

以上の事實は北海道と唐太島との連絡に向て最も參考とすべきものとす、余はこれに因てこの種の土器使用人民の唐太よりして、北海道にも廣く分布なし居りたるを認むることを得たり、尙ほ後の研究を待つ

第十章 オンキロン人種

コロホツク
ルに似たる
口碑

我北海道のアイヌは其地に堅穴、土器、石器などの存在せるを見て、是れアイヌ以前に棲息せし、コロホツクル Koropok-guru の手になりし殘物なりと云ひ傳ふ、かゝる口碑を傳ふるもの、東北亞細亞人種中、敢て少なきに非らず、則ちベーリング海峡の傍、亞細亞の北端に住するチュクチ Chukch 種族に於ける、オンキロン Onkion の如き又其一なりとす

ノルデンス
キヨルド氏

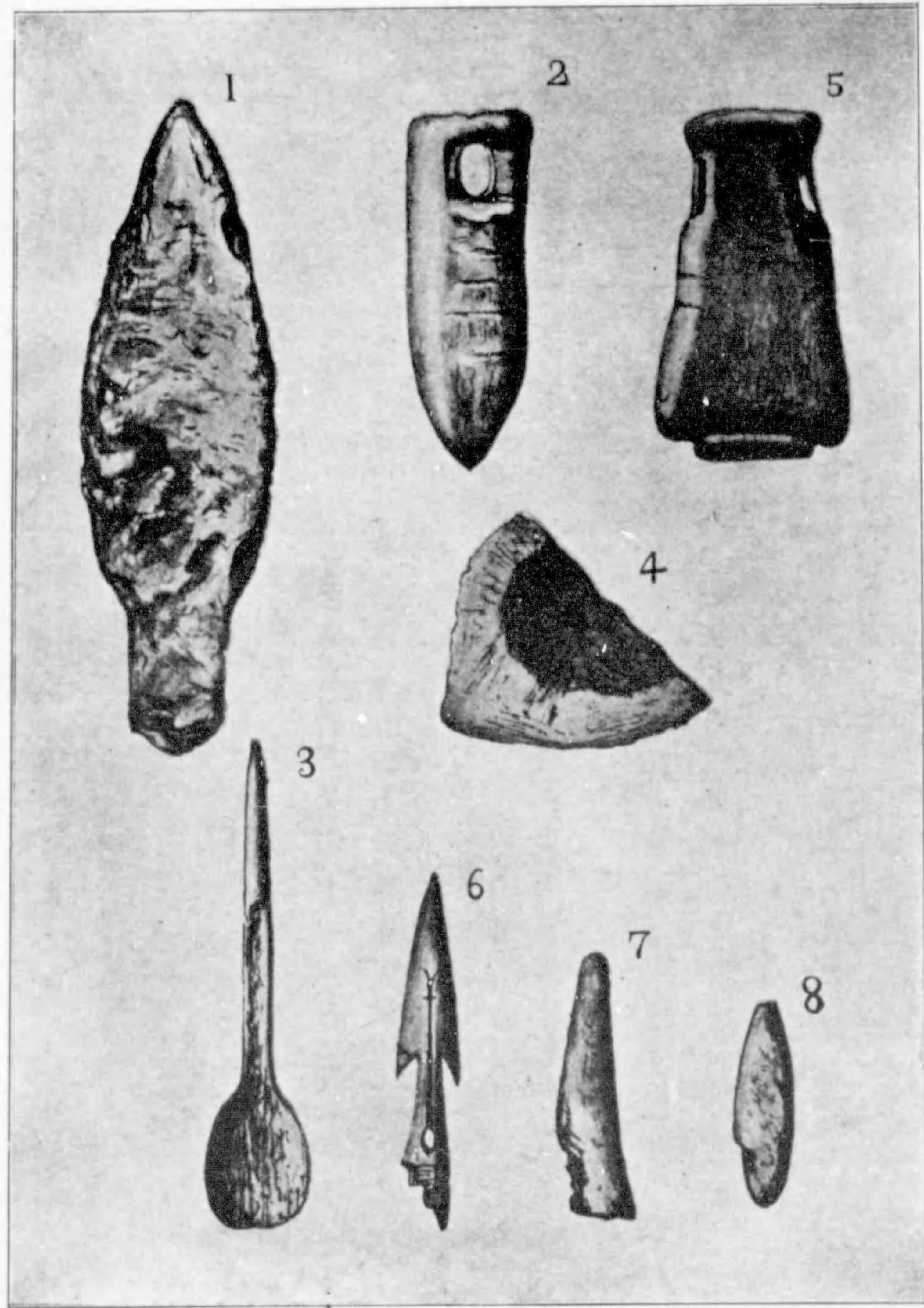
チュクチ種族のことに付て、精しき報告書を世に公にせられしは、實にかの有名なるノルデンスキヨルド氏にして Voyage of the Vega の書(英譯に従ふ)是れなり、かの人類學の大恩人たるクック氏の如きも一千八百七十八年八月に於てこの種族を訪へり

チュクチ種
族

チュクチは其附近にコリヤーク (Koriak) カムチャダール (Kamchadale) アリユート (Aleute) 及び我千島アイヌの如きが住居として堅穴を作るに拘はらず、これをなさずして鯨骨より骨組をなし、獸皮にておゝへるテントの内に住居し、其器具の如きは主として石器、骨器等を使用せり、而して彼等はモンゴリア人種に屬す可きものにして、其風俗に於て稍や北米に棲息するエスキモー種族と類似する所あり、このチュクチに就て二説あり、一は曰くエスキモーはもと亞細亞大陸に住せしものなりしが、後ベーリング海峡を渡りて北米に來りしものなるべし、其はチュクチのベーリング海峡の傍に



圖面平の穴堅ンロキンオ(貳) 跡遺の穴堅ンロキンオ(壹)



物遺るた出よ穴堅ンロキンオ

説明

- (1) スレート製の石鎗、實物三分の一
- (5) 骨柄の中よさし込みたる石鑿、實物二分の一
- (2) 同側面
- (3) 骨匙、實物三分の一
- (4) スレート製の小刀、實物三分の一
- (6) 骨鉞、實物三分の一
- (7) スレート製の小刀、實物三分の一
- (8) スレート製の石鎗、實物三分の一

現今尙ほ住するを以ても知らる、されば蓋しこのチユクチはエスキモーの亞細亞に於ける殘されるものならん。一は曰くチユクチのエスキモーと類似するは單に風俗の類似にして其昧質言語は二者大に相異なれり、さればチユクチとエスキモーは人種上何等の關係も存在せずと、余は寧ろ後者に從ふものなり、

チユクチやかくの如き石器時代の人民なりと雖も、尙ほ彼等の土地には尙ほ堅穴の遺跡諸所ありて、其近傍より石器、骨器の出づるあり、是等遺跡遺物に付て彼等は云ひけらく、我等の祖先が未だこの地に來らざりし以前、既に此地にオンキロンなる人民住居なし居りたり、而してこのオンキロンと云へるものは、其家屋は堅穴にして、石器、骨器を日用の道具として使用なしたり、一度祖先の來りしより、互に競争を生じ、遂に彼等は我等の種族に打ちまけ、何れの方にか逃げ行きぬ、現今存在する骨器、石器、堅穴の如きは、則ち彼等の殘物なり、と

この最も憐む可き口碑的人種 Traditional race の探險は、又ノルデンスキョールド氏の一行に據て確かめられたり、仍ち博士アルムキユイスト、副官ノールドキユイトの二氏はイルカイピジ Irkaijiti に於て其遺跡を發見し、オンキロンの住居跡たる堅穴を發掘し、近傍のゴミタメを研究し、數多の石器、骨器を採集せられたり、而してゴミタメは當時彼等の食ひし所のハキダメ場にして、この殘物は重に熊、馴鹿、海馬、其他よりなれり(氏のツイガ航海誌卷の一、四四二—四四五ページ)

以上の遺跡は果して、チユクチの傳ふるが如く、オンキロンなるもの、殘せしものなるか、余は未だこれに充分重きを置きて信ずるものに非らざれども、チユクチが堅穴を作らざると、當時彼等の海岸地方にアンカリ Ankali (Onkilon と Ankali 音最も近し)なる種族の存在するなどより考へなば、これを唯だ一の昔話として聞き流すこと能はじ、さればチユクチとオンキロンの關係は吾人の大に注意すべきものなりとす、

千島アイヌ 終

明治三十六年七月二日印刷
明治三十六年七月五日發行

千島アイヌ
實價金八拾五錢



發行所
全全

東京市京橋區南傳馬町二丁目
東京市日本橋區通リ三丁目
大防市東區南本町四丁目

吉川弘文館
全關東代理店
全關西代理店

著者 鳥居龍藏

發行者 吉川半七

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

印刷者 石川金太郎

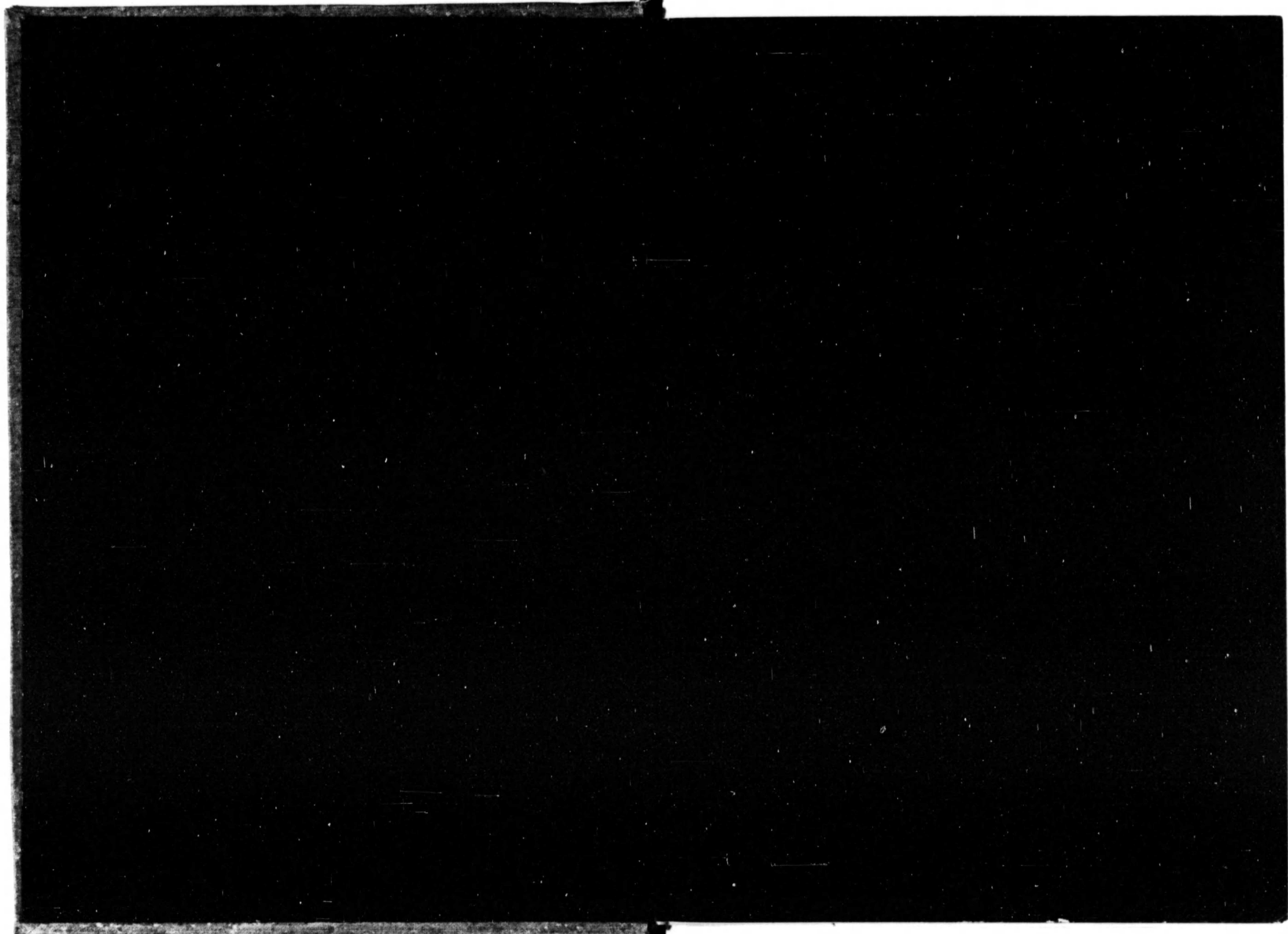
東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

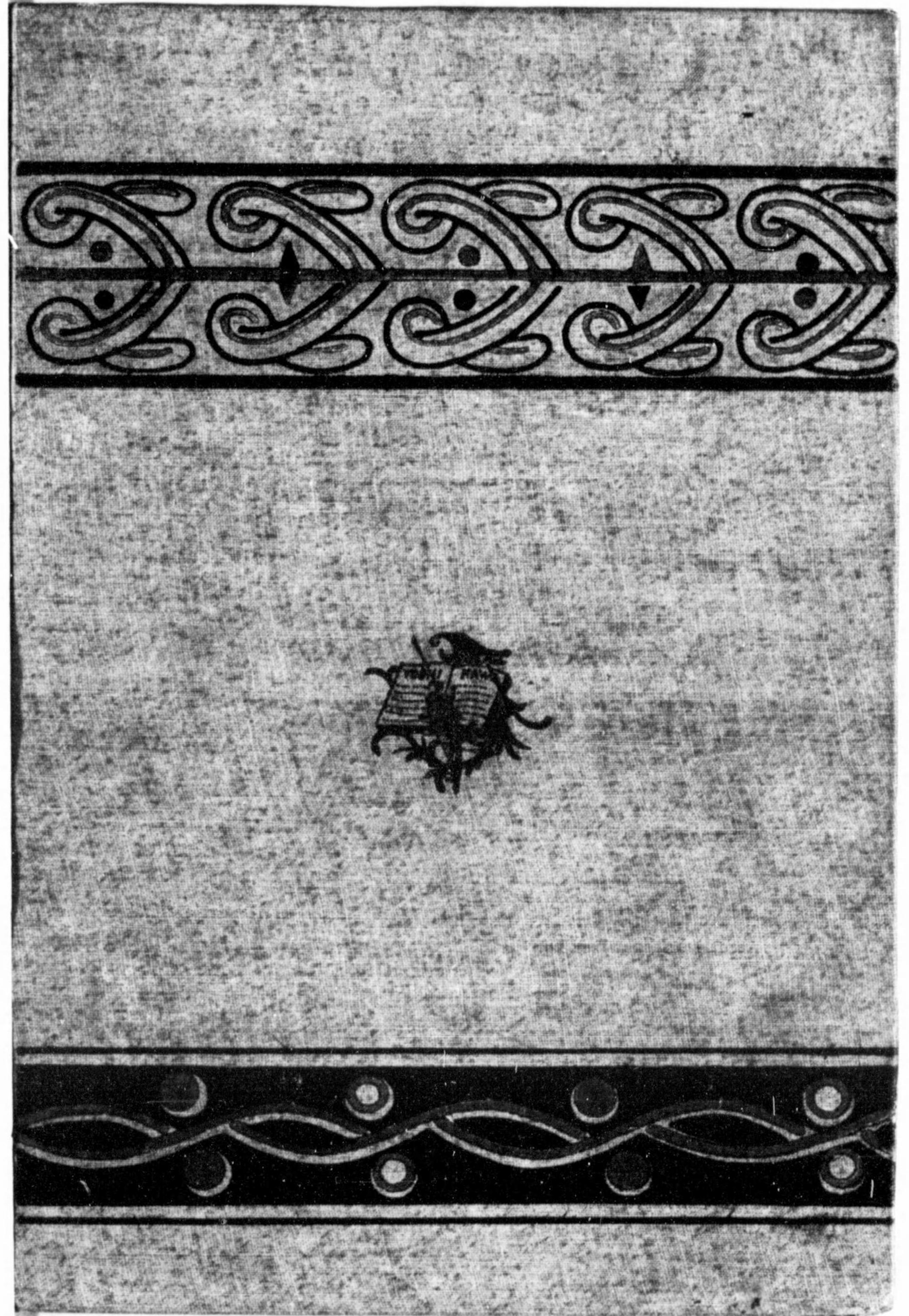
印刷所 株式會社秀英舍

東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

12

29. 6. 1







アイヌ島々

027360-000-7

389.11-To554t

千島アイヌ

鳥居 龍蔵/著

M36

ADJ-0116



